

千葉県印旛郡印旛村戸ノ内貝塚第5次発掘調査概報

高橋龍三郎・中門亮太・大網信良・新海達也

はじめに

縄文時代後・晩期に印旛沼周辺に立地した遺跡群は、汽水性の生態系に応じて湖沼の魚介類の捕採活動を営んだと考えられる。一方、その周囲を圍繞する低地部の森林と台地上の森林は、彼らの生存の源泉で、多くの動物性食料、植物性食料を提供したに違いない。台地上に占地し、森林を切り開いて占有された各々の集落群は、互いに指呼の間において、生業のみならず様々な社会関係を通じて、地域社会を構築したであろう。戸ノ内貝塚の住人は地域社会の一員として、様々な社会活動に参画したに違いない。問題は、その契機がいかなるものであったか、あるいは具体的な社会的関係がどのように構築されたか。さらに、それらがどのような考古学的証拠として反映するのか。私たちはまずそれらの問いかけから始めなくてはならない。

しかし、縄文時代の後・晩期の地域的な社会関係は、茫々としてなかなか姿を現さない。

一遺跡における遺構の全容が不明であること、一地域の遺跡群の構成が未解明であること、千葉県全域における後・晩期の様相が十分に解明されていないことがその原因である。逐一それらを煮詰めていくほかに接近法はないのであろう。

2007年度の調査において、幸いなことに竪穴住居の一部と多数の土坑を検出することができた。これは戸ノ内貝塚における後・晩期の居住に関する新たな情報を提供してくれた。遺物群との対応もこれから検討できるであろう。さらに2008年度は、この竪穴住居と入れ子状に重複して外側に拡大する大型の住居が検出された。印旛沼東岸地域において、後・晩期に属する斯様な住居は初めての検出である。地域社会の構成と役割を知る上でこの上ない情報源になった。それらは今後の調査に関する重要な指針を与えてくれるであろう。

本稿では、2008年度の調査の概要を報告し、検出した遺構と出土遺物群について簡潔に述べる。

(高橋龍三郎)

1. 調査概要

本次の調査概要は以下のとおりである。

調査対象：戸ノ内貝塚（第5次発掘調査）

所在地：千葉県印旛郡印旛村師戸字戸ノ内

調査主体：早稲田大学文学部考古学研究室

調査期間：2008年8月30日～9月25日（9月7・14・15日を除く、申請時より一日延長）

調査の種類：学術調査

調査面積：176㎡（申請時）

調査担当：高橋龍三郎（教授）・寺崎秀一郎（准教授）

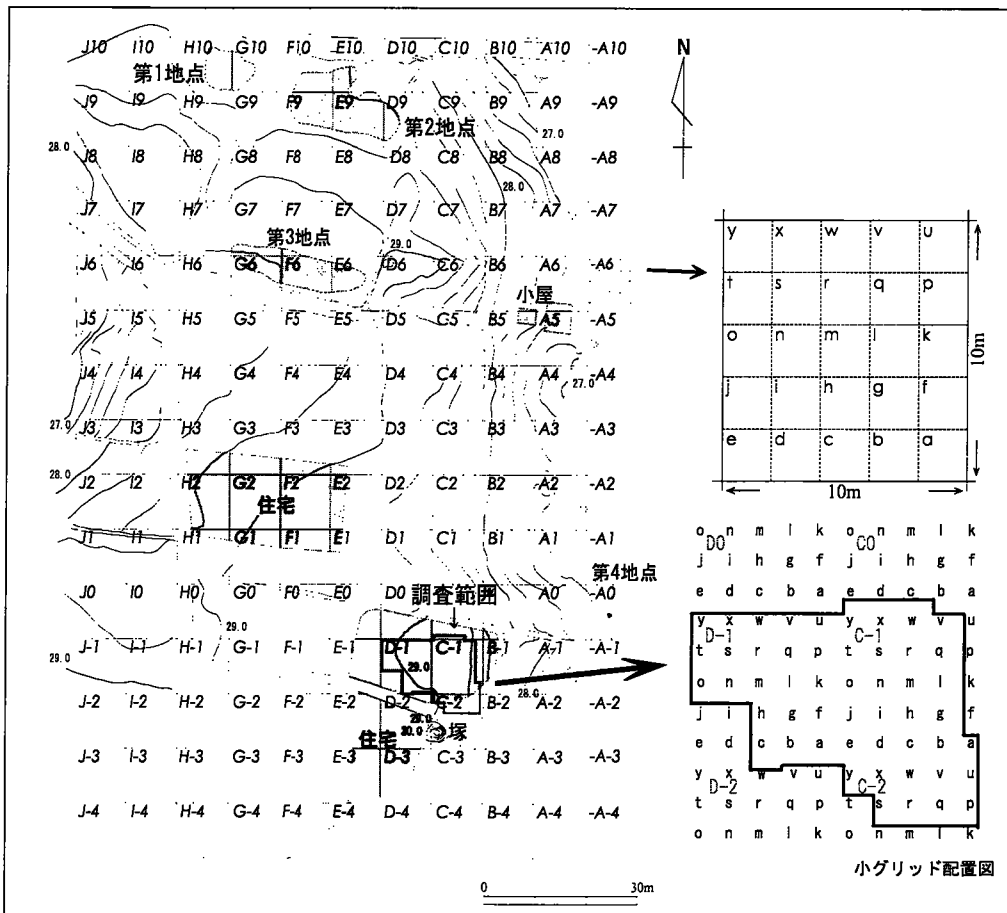
調査指導：菊池徹夫（教授）・近藤二郎（教授）・山形真理子（客員准教授）

能勢幸枝（印旛村教育委員会生涯学習課文化財係）・印旛村教育委員会・

千葉県教育庁教育振興部文化財課・千葉県教育委員会

調査主任：井出浩正

調査参加者：川畑隼人・中門亮太・大網信良・斉藤直幸・新海達也・高橋想・根兵皇平・



第1図 戸ノ内貝塚周辺地形図および第5次調査区

千田麗紗子・松吉祐希・三浦恵（以上、大学院生）
石井彩子・北村玲・竹島照雄・谷典子・釣谷菜々未・林智久・平原信崇・
三浦由紀子・深山絵実梨・山尾和宏（以上、学部4年生）
新井才二・岩井聖吾・小島信太郎・服部智至・八林朋宏（以上、学部3年生）
内山和彦・榎本友翔・大下哲史・太田ちひろ・荻野貴文・加藤南・金井美幸・
鴨志田弥代・楠田孝次・熊崎真司・小泉なな・小林まりえ・小原俊行・酒巻七絵・
高橋慧・谷沙友里・田淵晶子・中西駿介・長場俊之・西村広経・根本進太郎・
半田竜介・古市智樹・古川和宏・曲淵友香・水本朋菜・宮野あすみ・村越佳奈・
森本達也（以上、学部2年生）
阿部和俊（第二文学部学部生）
※ほか、本稿をまとめるにあたり、上記参加者の他に坂本翼、萩原亘、鈴木朋美、
ナワビ・アハマッド・矢麻が整理作業に参加した。（大網信良）

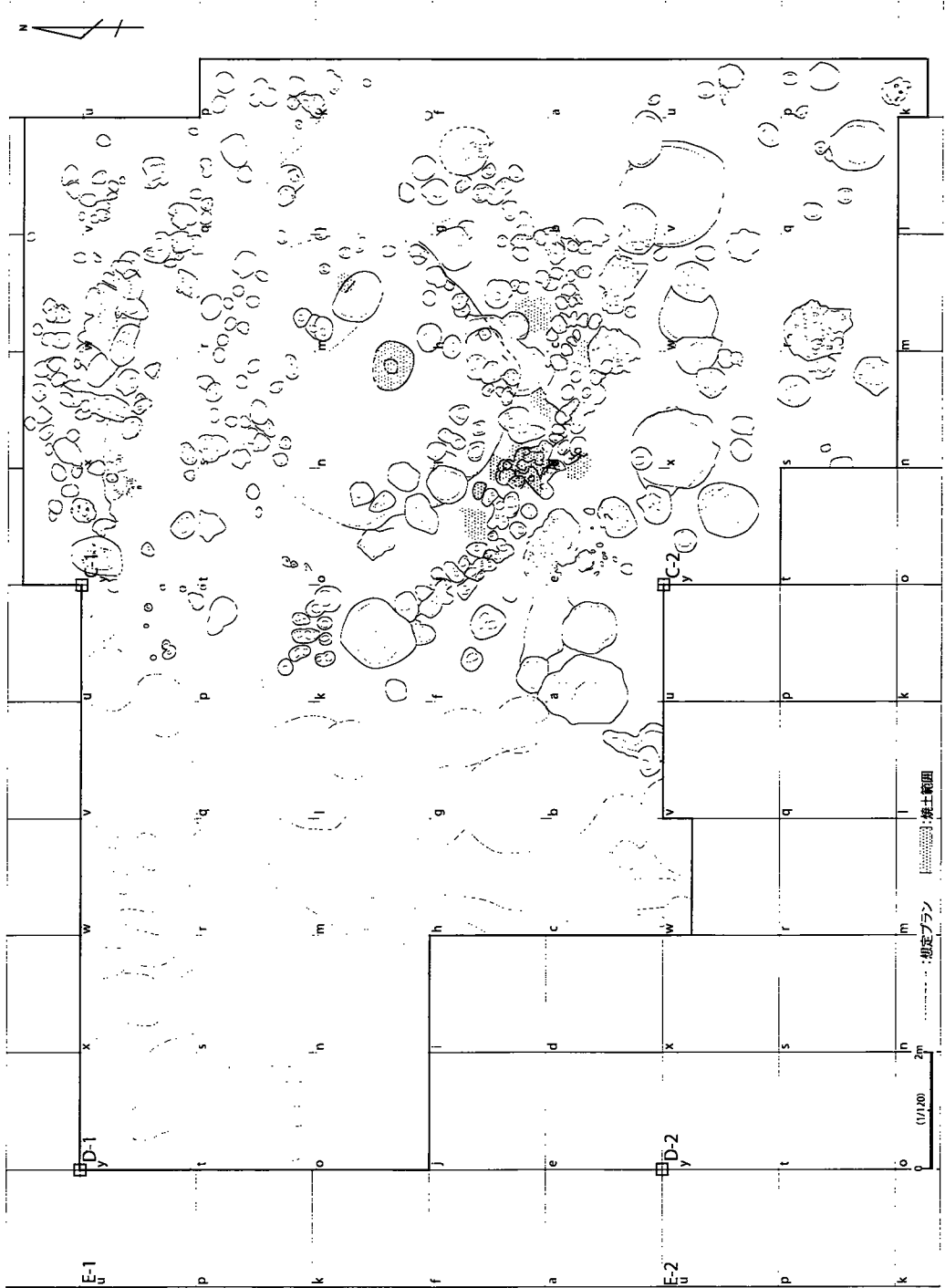
2. 調査の経過と方法

本発掘調査は、考古学コースの正課授業である考古学演習（実習）の夏季野外調査である。早稲田大学考古学研究室では、千葉県印旛郡印旛村師戸に所在する戸ノ内貝塚を対象に、2003年度の測量（0次）調査以降、6ヶ年にわたり継続して調査を実施している。

第5次発掘調査は、第4次発掘調査終了段階で確認された、縄文時代晩期前葉に比定される住居跡（SI01）の周辺に廻るピット列の発掘調査と、D-1グリッドに埋蔵されている遺構の確認を主目的とした（第1・2図）。

調査経過は次のとおりである。まず高橋龍三郎・井出浩正・中門亮太・大網信良・新海達也・高橋想・根兵皇平の7名からなる先遣隊が、8月30日正午より作業を開始した。作業内容は、測量基準点の設定や発掘区および周辺の整備、また一部発掘区の人による廃土除去等で、明るく8月31日まで行った。本格的な調査開始日である9月1日以降は学部2年生が参加し、9月1日から6日、9月8日から13日、9月16日から24日の3クールに分け、発掘調査を行った。本次調査では、連日の降雨により調査の進捗が妨げられることがしばしばあり、結果、予定されていた調査期間を一日延長し、9月25日に人力と重機による埋め戻しを行い、調査が完了した。また9月23日には、ラジコンヘリによる発掘区全体写真撮影および地元関係者を対象とした現地説明会を行った。

記録方法はこれまでと同様に、遣り方測量とオートレベルを用いた遺構図面作成、およびトータルステーションと電子平板（使用ソフト「GuiderIV」）を用いた遺物の取り上げを中心としている。遺物の遺構間接合等の把握を念頭に、極力出土遺物すべての出土位置を記録することにつとめた。



第2図 戸ノ内貝塚第5次遺構平面図

なお、第5次発掘調査にかかる図面・写真類および出土遺物については早稲田大学考古学研究室が保管し、2008年10月より整理作業を開始し、現在も継続中である。(大網信良)

3. 検出された遺構と遺物

1号住居跡(SI01)外周ピット(第3図)

第5次調査では、第4次調査(高橋ほか2009)で調査区北東において検出した、縄文時代晩期前葉に比定される1号住居跡(以下「SI01」と呼称)周辺で、当該遺構に関連する遺構の検出及び精査を行った。その結果、SI01の外側を取り囲む複数のピット群を確認した。SI01の周辺に位置する土坑は約300基あり、すべての土坑を図面に記録することは調査期間等の都合上困難であったため、プランは光波測距儀と電子平板を用いて記録を行った。断面は最大限図面に反映できるよう考慮して、14本のエレベーション図を記録した(第3図)。なお、各土坑の径及び深さは別に記録をしている。

位置: C-1グリッド。第5次調査発掘区の北東寄り、表土層下の地山面(ハードルーム面)で検出した。

規模・形態: SI01の北半分は、後世の溝状遺構により破壊されているが、ピット群は溝状遺構の北側にも延長し、大きくSI01を取り囲むものである。ピット群の配列から、東西約7.2m×南北約6.9mで隅丸の略正方形を呈する遺構であると考えられる。ピット群は、SI01南側では大きく2～3列の列状を呈しているが、SI01北側では列状配置はやや不明瞭である。ピットの平均径は20cm内外を計るが、深度は10cm程度のものから150cmを超えるものまであり、一定ではない。

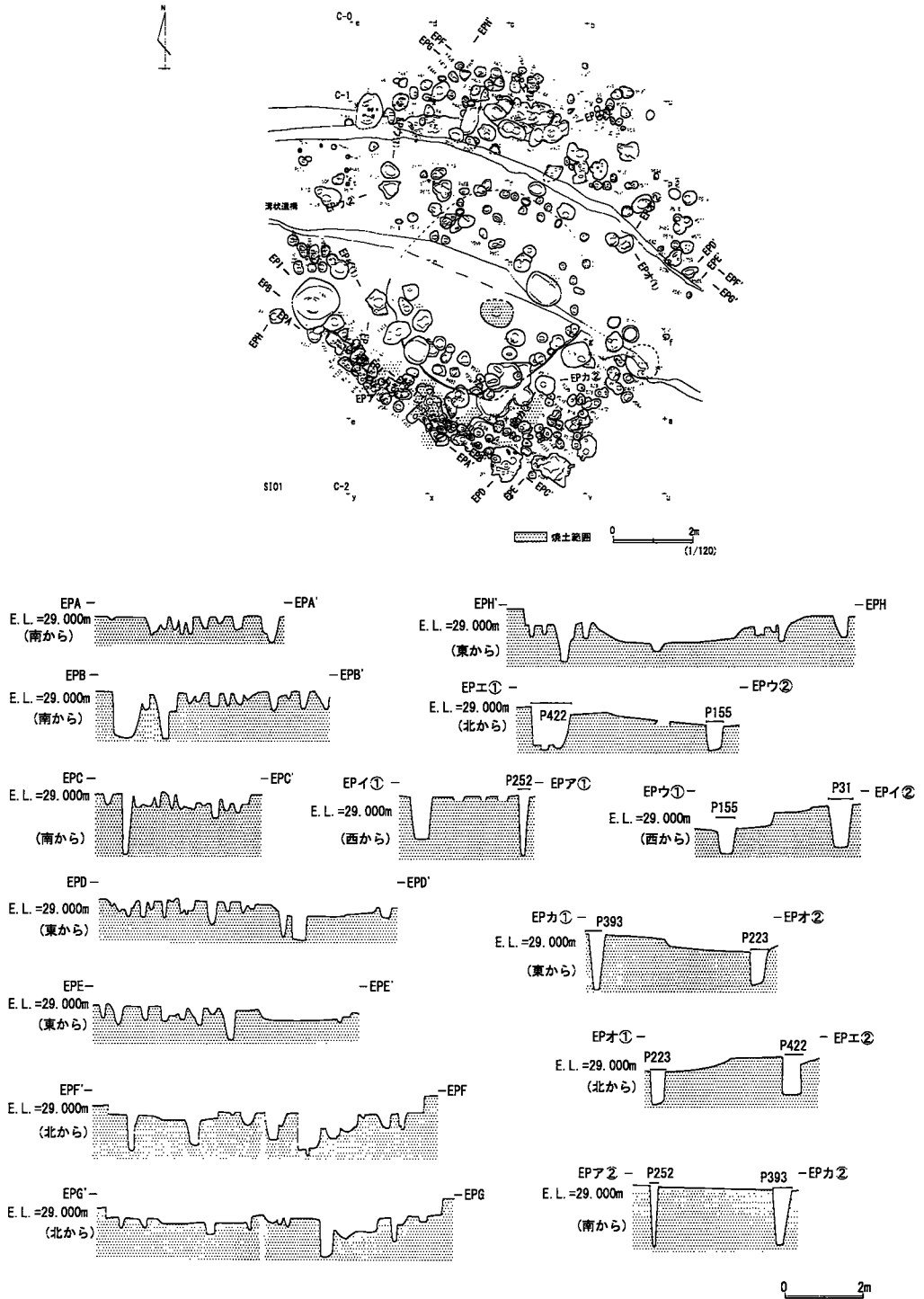
内部施設: 後世の攪乱もあり、ピット群の内部では壁の立ち上がりや覆土、内部施設等は確認できなかったが、南側にめぐるピット列の内側際には、少なくとも数か所の焼土範囲を確認できた。いずれも恒常的な火床と特定するほどの被熱は認められなかったものの、ピット群の検出面と同レベルで検出した。

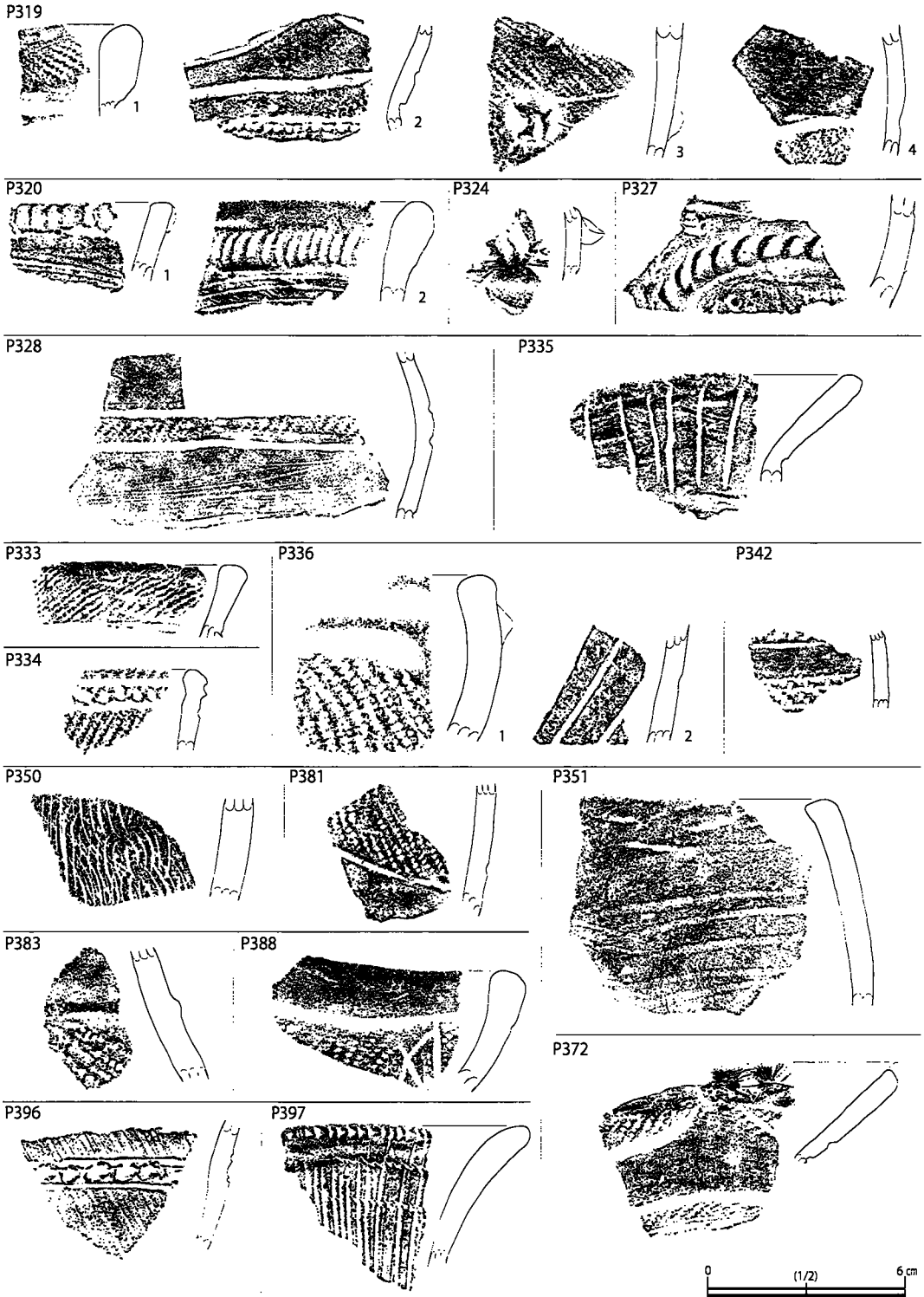
出土遺物: SI01外周ピットから出上した遺物は、いずれも微小な土器片が多い。土器は中期加曽利E式や晩期安行式などもみられるが、後期安行1～2式が主体を占めている。その他には土器片錘や土偶破片、石器が出土している。本稿では、時期判別が可能なものをできる限り図示した(第4～6図、第1～3表)。

時期: 出土遺物や規模・形態から、後述するように、これらの外周ピット群は縄文時代後期末から晩期初頭に帰属する、大型住居に伴う遺構であると考えられる。(中門亮太)

第5次調査で検出された石器について

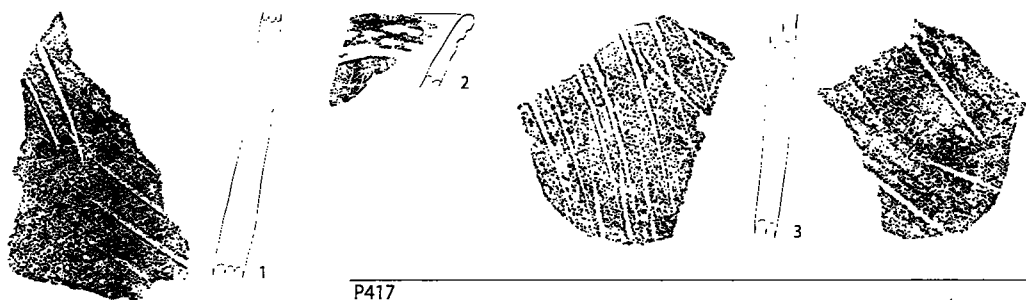
第5次調査で検出された石器・石製品は微細な剥片まで含めると、総計87点である。その内訳は、石鏃6点、磨石類6点、打製石斧1点、砥石1点、玉1点である。なお、本稿では、紙面の



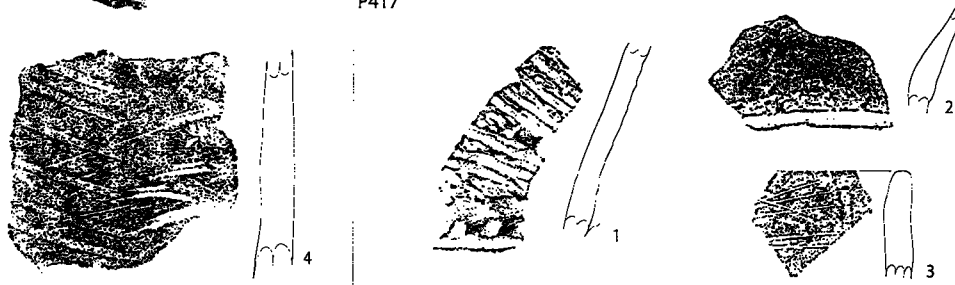


第4図 SI1外周ピット出土土器①

P393



P417



P422



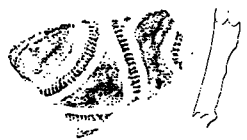
P429



P432



P441



P443



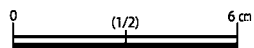
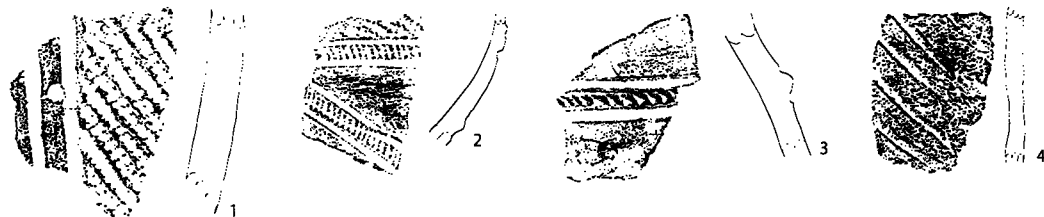
P460



P461



P470



第5図 SI01外周ピット出土土器②

P534



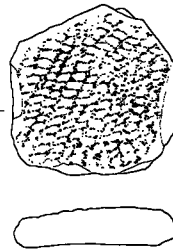
P581



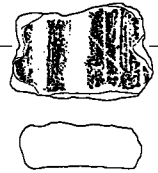
P590



P591



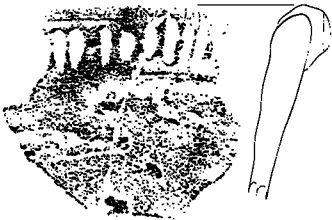
P611



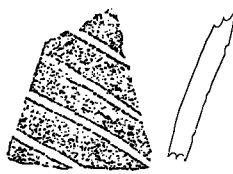
P605



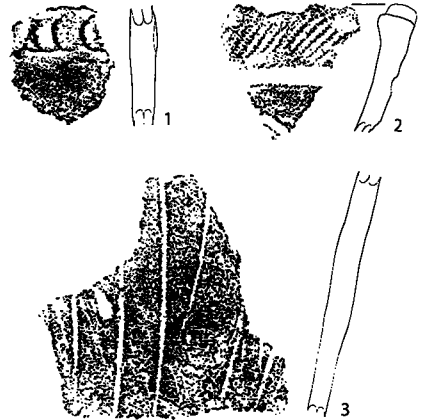
P682



P707



P709



P714



P720



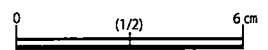
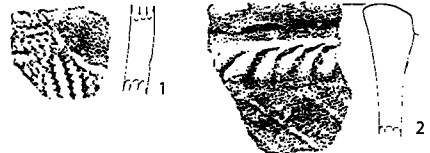
P723



P724



P735



第6図 SI01外周ピット出土土器③

第1表 SI01外周ピット出土土器 観察表①

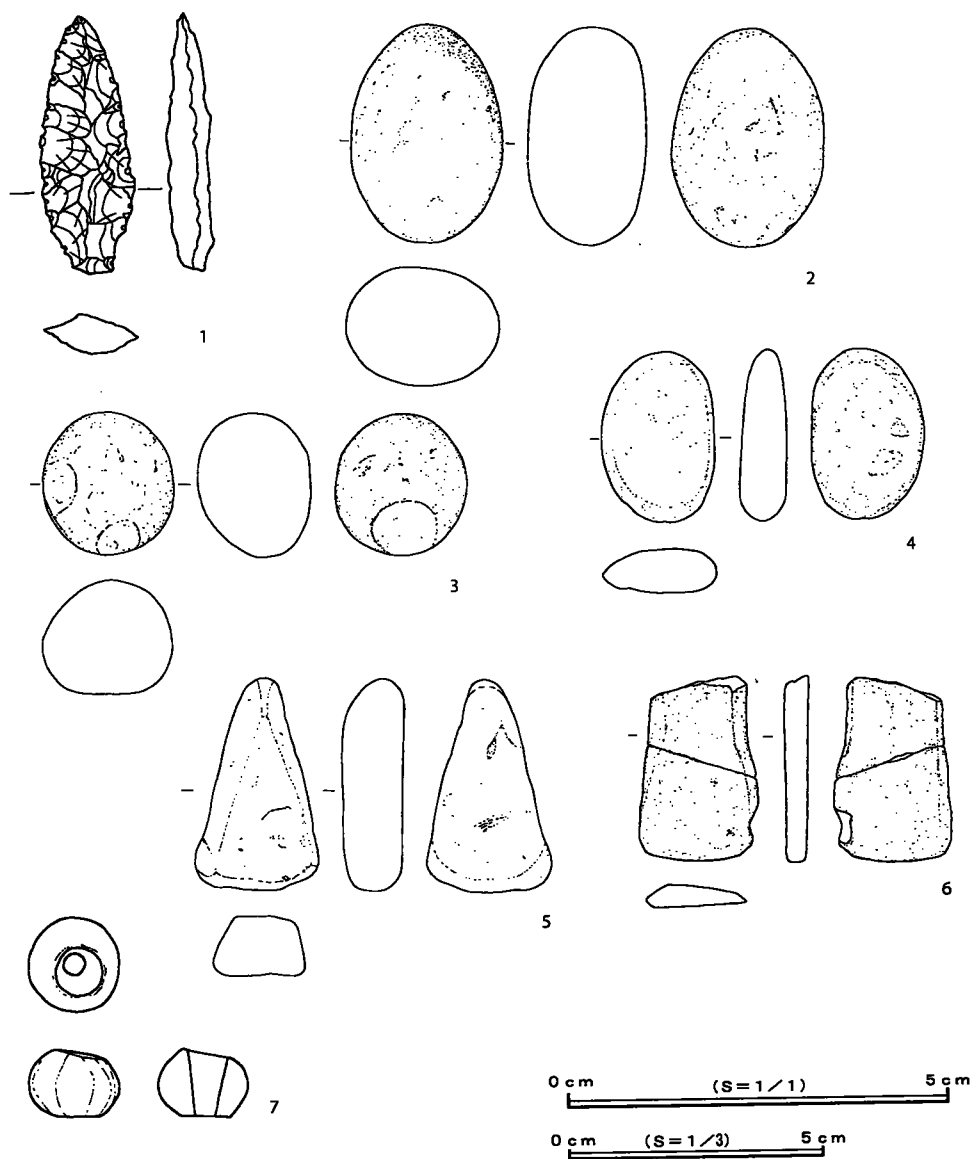
調査 番号	出土遺構 遺物No.	時期 土器型式	器形 部位	文様の施文工程ほか	器具調整 :(外蓋) :(内蓋)	色澤 :(外蓋) :(内蓋)	胎土	備考
第4区	P319 1	後期後葉 安行2式	深鉢 口縁部	縄文単節 RL を肥厚した口縁部に施す⇒幅約 4mmの棒状工具による沈線で区画	:「丁寧なナデ	:灰黄褐色 :灰黄褐色	φ1mm以下の雲母片 を少量含有。密。	
第4区	P319 2	後期後葉 安行1式	深鉢 胴部	幅約3mmの棒状工具による沈線で胴部区画⇒ 屈曲部に幅約3mmの棒状工具による円形の刺 突を巡らせる⇒幅約4mmの棒状工具による沈 線で胴部に弧状の文様を描く	:「丁寧なナデ	:ぶい黄褐色 :褐色	φ1mm以下の白色粒 子、雲母片を少量含 有。密。	
第4区	P319 3	後期後葉 安行2式	深鉢 胴部	幅約1mmの棒状工具による沈線⇒縄文単節 RL⇒豚尻状の粘土粒貼付	:「丁寧なナデ	:オリーブ黒色 :黒色	φ1mm以下の白色粒 子、赤色粒子を少量、 雲母片を中量含有。 密。	
第4区	P319 4	晩期	深鉢 胴部	縄文単節 RL⇒幅約4mmの棒状工具による沈 線で弧状の区画を描く	:ケズリ :「丁寧なナデ	:極暗褐色 :ぶい褐色	φ1mm以下の雲母片 を中量、白色粒子を 少量含有。密。	
第4区	P320 1	後期後葉 安行2式	深鉢 粗製 口縁部	幅約1mmの棒状工具による横位の条線⇒幅約 9mm、断面扁平な粘土紐の貼付⇒粘土紐上 に指頭押圧を施す	:「ナデ	:褐色 :褐色	φ1mm以下の白色粒 子、雲母片を少量含 有。密。	
第4区	P320 2	後期中葉 加曾利B式	深鉢 粗製 口縁部	幅約1mmの棒状工具による横位の条線⇒幅約 7mm、断面扁平な粘土紐を口唇に貼付⇒粘土 紐上に指頭押圧を施す	:「ミガキに近 いナデ	:灰黄褐色 :灰黄褐色	φ1mm以下の雲母片 を少量含有。密。	
第4区	P324	晩期前葉 安行3a式	深鉢 胴部	断面三角形の粘土粒貼付⇒粘土粒上に幅約4 mmの棒状工具による短沈線を2本施す	:ナデ :ナデ	:黄褐色 :暗灰黄色	φ1mm以下の白色粒 子、雲母片を少量含 有。密。	
第4区	P327	後期中葉 加曾利B式	深鉢 粗製 胴部	幅約11mm、断面扁平の粘土紐貼付⇒粘土紐上 に指頭押圧を施す	:「丁寧なナデ	:灰黄褐色 :灰黄褐色	φ1mm以下の白色粒 子を中量含有。密。	
第4区	P328	晩期前葉 安行3式	深鉢 胴部	縄文単節 LR⇒幅約2mmの棒状工具による沈 線で横位の区画	:ナデ、ミガキ :「丁寧なナデ	:黒褐色 :黒褐色	φ1mm以下の白色粒 子、雲母片を少量含 有。密。	
第4区	P333	晩期	深鉢 口縁部	無節縄文 L⇒幅約2mmの棒状工具による沈線 で横位の区画	:「ミガキ	:明赤褐色 :明赤褐色	φ1mm以下の白色粒 子、雲母片を少量含 有。密。	
第4区	P334	後期中葉 加曾利B式	深鉢 口縁部	縄文単節 LR⇒幅約2mmの棒状工具による2 条の沈線を横位に巡らせる⇒沈線間に幅約4 mmの棒状工具による楕円形の刺突を充填⇒幅 約7mmの棒状工具により、内面に緩やかな稜 を作出	:「丁寧なナデ	:褐色 :褐色	φ1mm以下の雲母片 を中量、白色粒子を 少量含有。密。	
第4区	P335	晩期	深鉢 口縁部	幅約2mmの棒状工具による縦位の沈線⇒幅約 3mmの棒状工具による横位の沈線を巡らせる	:ケズリ :「丁寧なナデ	:ぶい褐色 :褐色	φ1mm以下の白色粒 子を少量、雲母片を 微量含有。密。	
第4区	P336 1	中期後葉 加曾利E式	深鉢 口縁部	縄文単節 RL⇒口唇下に隆帯を横位に貼付⇒ 隆帯脇を幅広の沈線あるいは指ナデで押さ える	:「丁寧なナデ	:明褐色 :褐色	φ1mm以下の白色粒 子を中量、透明粒子 を少量含有。密。	
第4区	P336 2	後期後葉 安行2式	深鉢 粗製 胴部	幅約2mmの棒状工具による縦位の条線	:ナデ :「丁寧なナデ	:暗褐色 :黒褐色	φ1mm以下の白色粒 子を少量、雲母片を 微量含有。密。	
第4区	P342	後期後葉 安行1式	深鉢 胴部	幅約1mmの棒状工具による横位の沈線⇒文様 内に縄文単節 RL を充填	:ミガキ :ミガキ	:黒褐色 :黒褐色	φ1mm以下の白色粒 子、雲母片を少量含 有。密。	
第4区	P350	中期後葉 加曾利E式	深鉢 胴部	5本一単位の櫛歯状工具による縦位波状条線 文	:「丁寧なナデ	:ぶい褐色 :灰褐色	φ1mm以下の白色粒 子、透明粒子を少量 含有。密。	
第4区	P351	晩期前葉 安行3式	深鉢 粗製 口縁部	幅約2mmの棒状工具による横位の条線	:ナデ	:ぶい黄褐色 :ぶい黄褐色	φ2mm以下の砂、φ 1mm以下の白色粒子 を少量、φ2mm以下 の赤色粒子を微量含 有。密。	
第4区	P372	晩期前葉 安行3b式	深鉢 口縁部	口唇および口縁部下に縄文単節 LR を横位に 帯状に巡らせる⇒幅約3mmの棒状工具による 沈線で、口唇に弧状の区画、口縁部下に帯状 の区画を施す⇒口唇にB突起貼り付け	:「丁寧なナデ :「丁寧なナデ	:明赤褐色 :褐色	φ1mm以下の雲母片 を中量、白色粒子を 少量含有。密。	
第4区	P381	後期後葉 曾谷式	深鉢 胴部	幅約2mmの棒状工具による弧状の区画⇒区画 内に縄文単節 RL を充填	:「丁寧なナデ :「丁寧なナデ	:褐色 :暗褐色	φ1mm以下の雲母片 を少量含有。密。	
第4区	P383	中期後葉 加曾利E式	深鉢 胴部	縄文単節 LR⇒横位に微隆起線貼付	:「丁寧なナデ	:褐色 :黒褐色	φ1mm以下の白色粒 子を中量含有。密。	
第4区	P388	中期後葉 加曾利E式	深鉢 口縁部	縄文単節 RL⇒幅約5mmの棒状工具による沈 線で文様を描く	:ナデ :「丁寧なナデ	:灰黄褐色 :灰黄褐色	φ1mm以下の雲母片 を中量、白色粒子を 少量含有。密。	

第2表 SI01外周ピット出土土器 観察表②

図版番号	出土遺構遺物No	時期土器型式	器形	部位	文様の施工程程ほか	器面調整 :(外面) :(内面)	色調 :(外面) :(内面)	胎土	備考
第4図	P396	後期中葉加曾利B式	深鉢粗製	胴部	幅約2mmの棒状工具による斜めの条線⇒幅約1mmの棒状工具による沈線で横位の区画⇒区画内にφ約7mmの棒状工具による楕円形の刺突を施す	:ナデ	:暗灰黄色 :灰黄褐色	φ3mm以下の砂、白色粒子を少量含有。密。	
第4図	P397	後期中葉加曾利B式	深鉢	口縁部	口唇に窪状工具による右方向からの刺突を巡らせる⇒幅約2mmの棒状工具による縦位の沈線⇒幅約2mmの棒状工具による刺突を横位に数列巡らせる	:ナデ	:褐色 :褐色	φ1mm以下の白色粒子、雲母片を少量、赤色粒子を微量含有。密。	
第5図	P393 1	後期後葉安行2式	深鉢粗製	胴部	幅約1mmの棒状工具による斜めの条線	:丁寧なナデ	:暗灰黄色 :黄灰色	φ1mm以下の白色粒子、雲母片を少量、透明粒子を微量含有。密。	
第5図	P393 2	晩期	鉢か	口縁部	幅約2mmの棒状工具による口縁部区画⇒区画上方に同様の工具による短沈線を2列充填	:ナデ	:暗灰黄色	φ1mm以下の白色粒子、赤色粒子を少量含有。密。	
第5図	P393 3	晩期前葉安行3式	深鉢粗製	胴部	幅約1mmの棒状工具による縦位の条線	:ナデ	:明黄灰色	φ1mm以下の白色粒子、透明粒子を少量含有。密。	
第5図	P393 4	晩期前葉安行3式	深鉢粗製	胴部	幅約1mmの棒状工具による横位の条線	:ケズリ	:暗灰黄色 :黄灰色	φ1mm以下の白色粒子、雲母片を少量含有。密。	
第5図	P417 1	後期中葉加曾利B式	深鉢粗製	胴部	幅約6mm、断面扁平な粘土紐貼付⇒粘土紐上に棒状工具による押圧を施す⇒粒の粗い縄文⇒幅約2mmの棒状工具を用いた斜めの条線	:丁寧なナデ	:暗灰黄色 :暗灰黄色	φ1mm以下の白色粒子、雲母片を少量含有。密。	
第5図	P417 2	後期後葉	深鉢	胴部	幅約4mmの棒状工具による沈線を横位に巡らせる	:ケズリ	:極暗赤褐色	φ1mm以下の白色粒子、透明粒子を少量含有。密。	
第5図	P417 3	晩期前葉安行3式	深鉢粗製	口縁部	幅約1mmの棒状工具による斜めの条線	:ナデ	:黒褐色	φ1mm以下の白色粒子を中量、雲母片を少量含有。密。	
第5図	P422	後期後葉安行1式	深鉢	口縁部	肥厚する口縁に縄文単節RLを巡らせる⇒帯縄文下に幅2～3mmの棒状工具による三角形の刻目を沿わせる	:丁寧なナデ	:褐灰色	φ1mm以下の白色粒子を中量、雲母片を少量含有。密。	
第5図	P429	後期後葉安行2式	深鉢粗製	胴部	幅約2mmの棒状工具による縦位の条線	:ナデ	:明黄褐色 :黒色	φ2mm以下の砂、φ1mm以下の雲母片を少量含有。密。	
第5図	P432	中期後葉加曾利E3式	深鉢	胴部	縄文単節LR⇒幅約6mmの沈線を縦位に施文(おそらく2本一単位)⇒沈線間の地文磨消	:ナデ	:黄褐色 :橙色	φ1mm以下の白色粒子を中量、透明粒子を微量含有。密。	
第5図	P441	後期後葉安行2式	注口か	胴部	幅約2mm、断面台形の微隆起線による文様区画⇒微隆起線間に幅約3mmの棒状工具による沈線を沿わせる⇒微隆起線上に幅約2mmの窪状工具による刻みを充填	:ミガキ	:極暗赤褐色	φ1mm以下の白色粒子を少量、φ3mm以下の赤色粒子を微量含有。密。	
第5図	P443	晩期前葉安行3c式	深鉢	口縁部	幅約5mmの棒状工具による横位の区画⇒区画内に同様の工具による楕円形の刺突を充填	:ケズリ	:黒褐色	φ1mm以下の雲母片を中量含有。密。	
第5図	P460	晩期前葉安行3式	深鉢粗製	口縁部	幅約3mmの棒状工具による横位の条線	:ナデ	:にぶい黄褐色	φ1mm以下の白色粒子を少量、雲母片を微量含有。密。	
第5図	P461	後期後葉安行1式	深鉢	口縁部	縄文単節RLを肥厚した口縁部に施す⇒縄文帯の下に幅約1mmの棒状工具による刺突を沿わせる	:丁寧なナデ	:褐色	φ1mm以下の白色粒子を中量、雲母片を少量含有。密。	
第5図	P470 1	中期後葉加曾利E3式	深鉢	胴部	縄文単節RL⇒幅約4mmの沈線を2本縦位に施文(おそらく3本一単位)⇒沈線間の地文磨消	:丁寧なナデ	:明褐色 :にぶい黄褐色	φ1mm以下の白色粒子・透明粒子を少量含有。密。	
第5図	P470 2	後期後葉安行2式	深鉢	胴部	縄文単節RL⇒幅約5mm、断面扁平な微隆起帯による文様区画⇒微隆起帯間に幅約2mmの棒状工具による沈線を沿わせる⇒微隆起帯上に幅約2mmの棒状工具による刺突を充填	:丁寧なナデ	:暗褐色 :黒色	φ1mm以下の白色粒子、雲母片を少量含有。密。	
第5図	P470 3	後期後葉安行2式	深鉢	胴部	幅約4mm、断面半円形の微隆起線貼付⇒微隆起線上に幅約4mmの窪状工具による斜めの刻みを充填⇒微隆起線間に幅約3mmの棒状工具による沈線を沿わせる	:ミガキ	:黄褐色 :黒褐色	φ1mm以下の白色粒子、雲母片を少量含有。密。	
第5図	P470 4	晩期前葉安行3式	深鉢粗製	胴部	幅約1mmの棒状工具による斜めの条線	:ナデ	:黒褐色	φ1mm以下の白色粒子、雲母片を少量含有。密。	

第3表 SI01外周ピット出土土器 観察表③

図版 番号	出土遺構 遺物No.	時期 土器型式	器形	部位	文様の施文工程ほか	器面調整 :(外面) :(内面)	色調 :(外面) :(内面)	胎土	備考
第6図	P534 1	中期後葉 加曾利E式	鉢か	胴部	5~6本単位の櫛歯状工具による縦位波状条線文	: :ナデ	:明赤褐色 :極暗赤褐色	φ1mm以下の白色粒子・透明粒子を少量含有。密。	
第6図	P534 2	晚期前葉 安行3a式	深鉢	口縁部	口縁部に縄文単節 RL⇒幅約2mmの棒状工具による沈線で区画⇒区画内の磨消⇒豚鼻状の貼付	:ナデ :ナデ	:にぶい黄褐色 :にぶい黄褐色	φ1mm以下の白色粒子、雲母片を少量含有。密。	
第6図	P534 3	晚期前葉 安行3c式	深鉢	口縁部	波頂部に粘土紐巻きつけにより突起を作出⇒突起の内面に幅約3mmの棒状工具による沈線を弧状に施す 同様の工具による2本一組の沈線で波頂部に沿った文様、同様の沈線で口縁部に文様を描く⇒文様内に幅約4mmの棒状工具による凹形の刺突を充填	:丁寧なナデ :丁寧なナデ	:オリブ黒色 :オリブ黒色	φ1mm以下の雲母片を中量、白色粒子、砂を少量含有。密。	
第6図	P581	後期後葉 安行2式	深鉢 粗製	胴部	幅約2mmの棒状工具による横位の条線	:ナデ :ナデ	:にぶい黄褐色 :にぶい黄褐色	φ1mm以下の雲母片を中量、白色粒子、φ2mm以下の赤色粒子を少量含有。密。	
第6図	P590	後期後葉 安行1式	深鉢	胴部	縄文単節 RL⇒幅約1mmの棒状工具による二条の沈線で横位の区画	:ナデ :ナデ	:暗灰黄色 :暗灰黄色	φ1mm以下の雲母片を中量、白色粒子を少量含有。密。	
第6図	P591	中期後葉 加曾利E式	深鉢	胴部	縄文単節 LR	: :ナデ	:極暗赤褐色 :黒色	φ1mm以下の白色粒子を多量含有。密。	土器片鏝
第6図	P605	後期後葉 安行1式	深鉢 粗製	口縁部	幅約1mmの棒状工具による斜めの条線⇒幅約6mm、断面扁平な粘土紐を口縁部に貼付⇒粘土紐上に指頭押圧を施す	: :ナデ	:褐色 :暗褐色	φ1mm以下の白色粒子、φ2mm以下の雲母片を少量含有。密。	
第6図	P611	中期後葉 加曾利E式	深鉢	胴部	単位不明の櫛歯状工具による縦位条線文⇒幅約6mmの2本一組の沈線による懸垂文⇒沈潜間を磨消	: :ナデ	:にぶい黄褐色 :にぶい黄褐色	φ2mm以下の砂粒を中量、φ1mm以下の白色粒子・黒色粒子を少量含有。密。	土器片鏝
第6図	P682	後期後葉 安行1式	深鉢 粗製	口縁部	幅約12mm、断面薄錐状の粘土紐貼付⇒粘土紐上に幅約10mmの篋状工具による刻みを充填	:ナデ :丁寧なナデ	:にぶい橙色 :にぶい黄褐色	φ1mm以下の雲母片を少量含有。密。	
第6図	P707	後期後葉 安行2式	深鉢 粗製	胴部	幅約1mmの棒状工具による斜めの条線	: :丁寧なナデ	:黒褐色 :にぶい黄褐色	φ1mm以下の白色粒子、雲母片を少量含有。密。	
第6図	P709 1	後期後葉 安行1式	深鉢 粗製	胴部	幅約8mm、断面扁平な粘土紐貼付⇒粘土紐上に指頭押圧を施す	:ナデ :ナデ	:灰黄褐色 :灰黄褐色	φ2mm以下の白色粒子、φ1mm以下の雲母片を少量含有。密。	
第6図	P709 2	晚期前葉 安行3b式	深鉢	口縁部	口唇に突起貼り付け⇒口縁部に縄文単節 LR⇒幅約4mmの棒状工具による沈線で文様を描く	:ミガキ :ケズリに近いナデ	:極暗褐色 :暗黄褐色	φ1mm以下の白色粒子、赤色粒子、雲母片を少量含有。密。	
第6図	P709 3	晚期	深鉢	胴部	幅約2mmの棒状工具による縦位の条線	:ナデ :ナデ	:暗灰黄色 :灰黄褐色	φ1mm以下の白色粒子を中量、透明粒子を少量含有。密。	
第6図	P714	後期後葉 曾谷式	深鉢	胴部	縄文単節 LR⇒幅約1mmの棒状工具による沈線で弧状の文様を描く	:ナデ :丁寧なナデ	:橙色 :にぶい黄褐色	φ1mm以下の透明粒子、赤色粒子を微量含有。密。	
第6図	P720	晚期前葉 安行3a式	深鉢	口縁部	口縁部に縄文単節 RL⇒幅約5mmの棒状工具により、三叉文、曲線的な文様を描く	:ミガキ :丁寧なナデ	:黒褐色 :黒褐色	φ1mm以下の白色粒子を中量、φ2mm以下の赤色粒子、φ1mm以下の雲母片を少量含有。密。	
第6図	P723	後期後葉 安行2式	深鉢	胴部	幅約8mmの微隆起帯上に縄文単節 RL⇒微隆起帯上に幅約1mmの棒状工具による沈線に沿わせる	:丁寧なナデ :丁寧なナデ	:黒色 :黒色	φ1mm以下の白色粒子、雲母片を少量含有。密。	
第6図	P724	後期後葉 安行1式	深鉢	口縁部	縄文単節 LRを肥厚した口縁部に施す	:ナデ :ナデ	:にぶい褐色 :にぶい黄褐色	φ1mm以下の白色粒子を少量、雲母片を微量含有。密。	
第6図	P735 1	後期後葉 曾谷式	深鉢	胴部	縄文単節 RL⇒幅約1mmの棒状工具による弧状の文様を描く	:ナデ :丁寧なナデ	:暗灰黄色 :暗灰黄色	φ1mm以下の雲母片を少量含有。密。	
第6図	P735 2	晚期前葉 安行3式	深鉢 粗製	口縁部	口唇に幅約9mm、断面凹形の粘土紐を貼付⇒粘土紐上に右斜め下からの指頭押圧を施す⇒幅約2mmの棒状工具による斜めの条線	: :丁寧なナデ	:暗灰黄色 :黒褐色	φ1mm以下の白色粒子、雲母片を少量含有。密。	



第7図 SI01外周ピット出土石器・石製品（1・7の縮尺は1/1、2～6は1/3）

都合上、SI01外周ピット出土資料を中心に掲載した（第7図・第4表）。

1は有茎石鏃であり、茎部を一部破損している。2～5は磨石である。円形、楕円形など形状は様々である。2は全面にわたってよく磨られている。3も表裏面に平坦な磨面がみられ、さらに一部被熱したように赤色化している。

6は砥石である。短冊形を呈しており、半分欠損している。表裏面ともに側縁部に使用痕跡と

第4表 第5次調査出土石器・石製品 観察表

No.	器種	出土位置	石材	法量				備考
				長さ	幅	厚さ	重量	
1	石鏃	P386	チャート	34mm	13mm	6mm	2.2g	
2	磨石	P319	砂岩	87mm	61mm	47mm	378.4g	完形
3	磨石	P319	不明	69mm	45mm	19mm	85.9g	完形
4	磨石	P336	砂岩	57mm	53mm	46mm	190.2g	完形
5	磨石	P534	不明	75mm	50mm	25mm	137.9g	完形
6	砥石	P319	砂岩	84mm	48mm	9mm	46.6g	
7	玉	P352	翡翠	最大径	厚さ	孔径	重量	
				12mm	9mm	3~6mm	1.9g	

思われる砥面がある。7は円形の玉であり、中央部に穿孔加工が施されている。（新海達也）

4. SI01外周ピットの検討—千葉県における後・晩期大型住居との比較から—

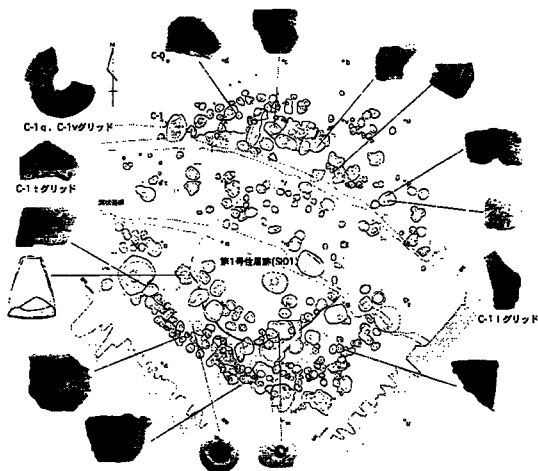
印旛沼周辺では、縄文時代後期から晩期にかけての大型住居跡が多数報告されている。千葉県における大型住居は、加曾利B式期から曾谷式期に大きさのピークがあり、曾谷式期から安行1式期を境に中型の住居との境界が曖昧になる傾向がある（吉野2007）。同時に、この時期は特殊遺物の出土や焼土の分布など、大型住居に見られた要素が、小型・中型の住居においても認められるようになる時期である。これらを踏まえたうえで、SI01外周ピットが帰属すると考えられる安行2～3a式期の大型住居跡事例を確認し、若干の検討を行いたい（第8図）。

安行2式期

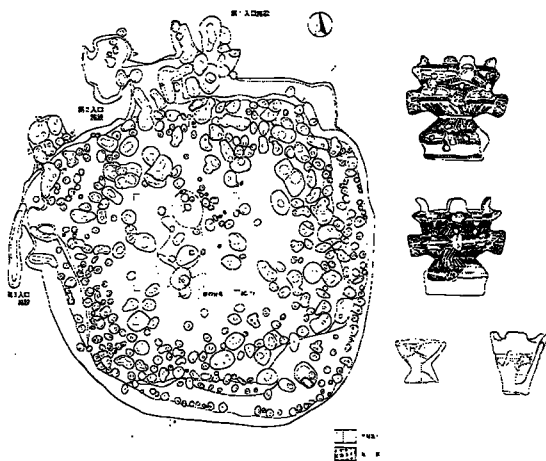
安行2式期の大型住居は、中沢貝塚25号住居跡、三直貝塚SI-004Bなどがある。平面プランは円形、方形があり、規模は小さめである。いずれも複数回の建て替えが見られる。中沢貝塚例では周縁炉が検出されており、出土遺物としては異形台付土器が見られる。

安行3a式期以降

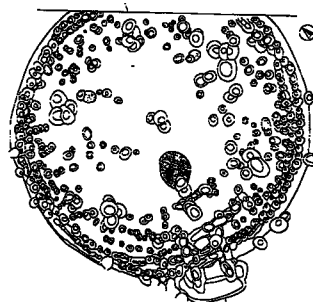
安行3a式期以降の大型住居は、三直貝塚SI-004B、SI-029、宮内井戸作遺跡118号住居、吉見台遺跡A地点6号住居などがある。平面プランは方形、円形、五角形（三直貝塚SI-004B）など多様であり、宮内井戸作遺跡例のようにかなり大規模なものもみられる。出土遺物の特徴としては、前時期と比較して異形台付土器が減少し、装飾的な浅鉢やミニチュア土器、石棒が出土する例が多くみられる。



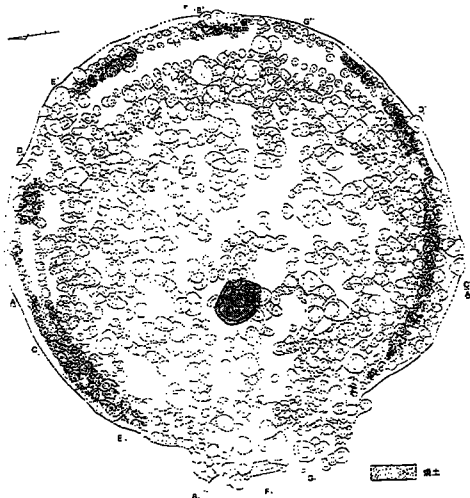
戸ノ内貝塚 (遺物は縮尺不同)



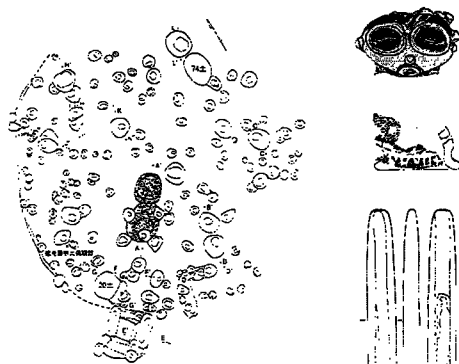
三直貝塚SI-004B住居



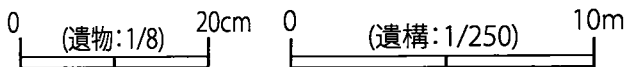
中沢貝塚 25号住居



宮内井戸作遺跡118号住居



吉見台遺跡 6号住居



第8図 千葉県における縄文時代後期末から晩期初頭の大型住居

SI01外周ピット

これまでの調査成果を加味すると、SI01外周ピットの内側からは土偶破片や耳飾り、異形台付土器、石棒、磨製石斧などが出土している。加えて、今回の調査ではピット群の内側際で数か所の焼土範囲を確認している。こうした遺物の出土状況や、複数の焼土範囲が存在する点は、当該期におけるいわゆる大型住居に共通する要素である。出土遺物や規模を比較すると、SI01外周ピットは後期末葉から晩期初頭の例とよく似ていることがわかる。当該期が大型住居と一般的な住居との差が小さくなる時期であることも考慮すると、今回検出したピット群は、規模はやや小さいものの大型住居を構成する遺構であると考えて問題ないであろう。

今後は、各ピットの覆土や規模、出土遺物などを詳細に検討し、支柱穴の配置や建て替えの可能性などを検討していく必要がある。(中門亮太)

おわりに

早稲田大学が5年間にわたって継続してきた戸ノ内貝塚の発掘調査は、本年度の調査で大きく転回した。縄文時代の後・晩期に属するやや大型の住居を検出したからである。それは昨年度調査で検出された痕跡的な竪穴住居の外側に、さらに一回り大きな住居として検出された。立ち上がりに壁などは検出されず、したがって竪穴と称してよいか問題であるが、隅丸の正方形に取り巻く柱穴列が住居の範囲を明確に示していた。後期後葉から晩期前半期の遺物が検出されており、ほぼそれらの広い時間幅の中で捉えておきたい。

今まで、印旛沼周辺の縄文社会の復元を目指し資料の収集に努めてきたが、ここに居住に関する重要な材料を加えて、我々の研究は一段と飛躍したことはまちがいない。昨年度までの調査で、台付土器や耳環、土製品などの宗教的、呪術的な遺物が断片的に発見されながらも、遺構との明確な関連を欠いたため遺物群の理由付けがいま一つ明瞭性を欠いていたからである。2008年度の調査成果は、その問題に対して一定の解答をあたえるものであった。この時期、この地域に一般にみられる大型住居は、通常そこから出土する異形台付土器や石棒、耳環や動物形土製品などの非日常的な遺物との対応が顕著であり、それゆえに一般の竪穴住居とは異なる位置づけがなされてきた経緯がある。

本年度の調査は、奇しくもその懸案を解決するに必要なデータを与えてくれたわけである。一辺7mの住居は一般に大型住居と言われる住居としては最も小型の部類に属する。しかし、それでも内部および周辺部から検出された遺物群は、通常的大型住居のものとはほぼ同様の傾向を示していた。

近年、大型住居の機能や役割に関する議論が盛んになされている(吉野2007)。それらは集落全体の世帯群の中で、あるいは血縁紐帯にある一部の親族集団のなかで、あるいは集落の特定の性、年齢に限られる者達だけが利用できたのかもしれないが、当時の社会にあっては重要な役割

を果たしたに違いない。

本遺跡の発見例は、それに新たな一例を加えたことになる。さらなる解明を進めるうえで、今後出土遺物の検討、ほかの遺構との関連などを詰めていく必要がある。また、三直貝塚や宮内井戸作遺跡、祇園原貝塚、吉見台遺跡、中沢貝塚などの千葉県の諸例と比較する必要があり、一つの遺跡内での位置づけ、一地域内での位置づけなどの操作を経て、大型住居の問題は解明に就くと思われる。

最後になったが、調査に関してご理解・ご協力を戴いた地主の菊地茂氏、耕作者篠田征住氏、渡辺三代次氏に対して深甚なる謝意を表する次第である。また印旛村教育委員会、千葉県教育庁文化課の各位には終始ご協力をいただいた。感謝の意を表したい。さらに遺跡に直接おいでいただいでご教示を賜った多くの関係者の皆様には、一人ひとりの氏名を明記しないが改めて御礼を申し上げる次第である。

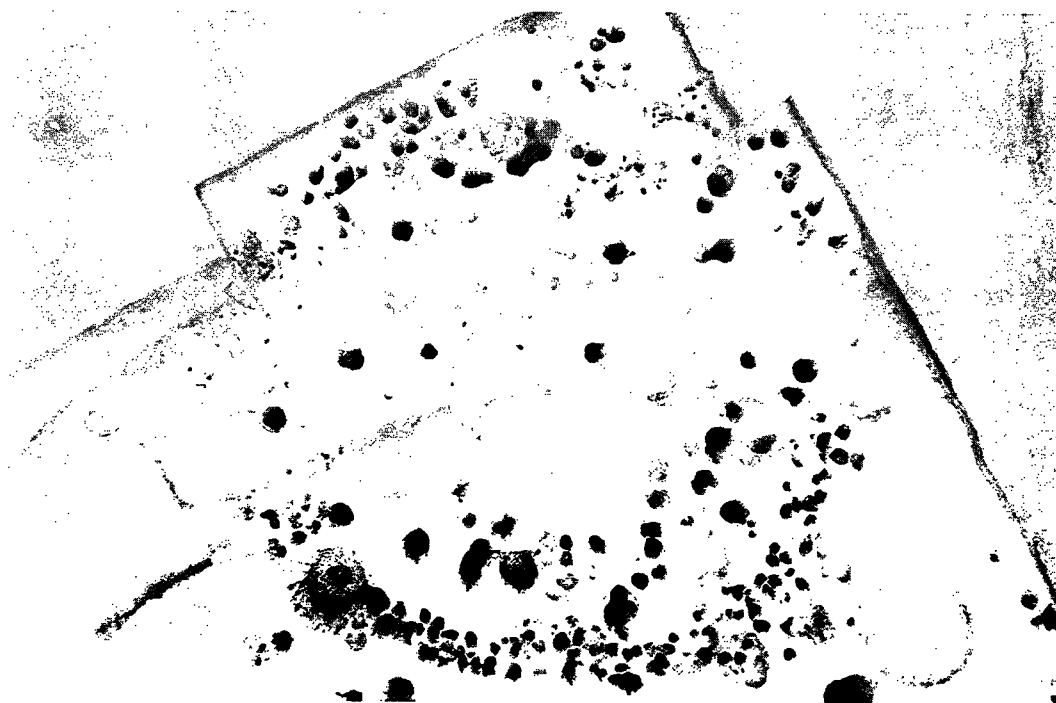
(高橋龍三郎)

引用・参考文献

- (財)印旛郡市文化財センター 1999 『千葉県佐倉市 吉見台遺跡 A 地点』
- (財)印旛郡市文化財センター 2003 『宮内井戸作遺跡発掘調査概報』
- (財)千葉県教育振興財団 2006 『東関東自動車道(木更津・富津線)埋蔵文化財調査報告書7 一君津市三直貝塚一』吉野健一 2007 『房総半島における縄文時代後・晩期の大型住居』『縄文時代の社会考古学』安齋正人・高橋龍三郎編 同成社
- 高橋龍三郎他 2009 『千葉県印旛郡印旛村戸ノ内貝塚第4次発掘調査概報』『早稲田大学大学院文学研究科紀要』(第54輯 第4分冊)
- 高橋龍三郎他 2009 『縄文時代晩期集落研究—千葉県印旛郡印旛村戸ノ内貝塚発掘調査成果を中心に—』『日本考古学協会第75回総会 研究発表要旨』
- (財)印旛郡市文化財センター 2007 『印旛の原始・古代—縄文時代編—』
- (財)千葉県史料研究財団 2000 『千葉県の歴史』資料編考古1



戸ノ内貝塚 第5次調査 全景写真（上が北）



SI01全景写真（上が北東）